連載

骨董百話 ㉔

伝ボロブドゥール出土「ジャムバラ」ブロンズ小像（高さ6.5cm、8～9世紀）

奈良の東大寺はシルクロードを経て伝わった仏教東進の最終地で、8世紀半ばに聖武天皇が鎮護国家の願いを込めて建立した。本尊の大仏（盧舎那仏）は世界最大のブロンズ座像で、大仏殿は木造建築として世界一を誇っている。

一方、インドネシアのジャワ島中部にあるボロブドゥール遺跡は仏教南進の終着地で、742年に誕生したシャイレンドラ朝が780～830年頃に建立した石造の仏教遺跡である。インドから発生した仏教がほぼ同時期に東と南へ向かい、それぞれの地で開花した。この世界最大級の仏教遺跡は全体の壮大さもさる事ながら、ほぼ全て安山岩で出来ていて、第一回廊から第四回廊まで総延長5kmに渡り「仏伝図」や「善財童子の善知識歴訪図」を含め、約1500面、登場人物一万人以上の精緻な人物レリーフが彫られている。しかし、この世界的な仏教遺跡は建立後すぐに王朝が崩壊し、続くサンジャヤ朝はヒンドゥー教を信奉した為、その後千年にわたり密林に埋もれ、また、近くにあるムラピ山は過去何度も大噴火を起こし、遺跡や周辺の村まで火山灰で埋め尽くしてしまった。

この手のひらに乗る程の小さなブロンズ像は、伝ボロブドゥール出土、「ジャムバラ」と呼ばれ仏教徒やヒンドゥー教徒から富の神として崇められている。本来なら豪華な玉座があるのだが破損して今は無い。火山灰の為か全体に熱を受けた感じがあるが、一部鍍金が残っているので造られた当初は富の神にふさわしく光輝いていたのだろう。ふくよかで若々しいお姿は1200年を経た今も、変わることなく慈愛の笑みを浮かべている。

glass & antique sara 店主・斎藤 貢

連載

骨董百話 23

五彩牡丹に獅子文大壷　明末清初（高さ33cm）

中国原産の牡丹は「百花王」と呼ばれ、花の頂点に位置付けられ「国色天香」と言えば絶世の美女の喩え。唐代以降愛され続けたこの花は、様々な詩や物語の題材となり、陶磁器だけでなく広く絵画や工芸全般に用いられ、牡丹に蝶、牡丹に太湖石など様式化されていく。宋代の周茂叔は「愛蓮説」で「菊は花の隠逸なるもの、牡丹は花の富貴、蓮は花の君子なり」と述べていて、そこから牡丹が富貴なイメージとして定着していく。そして高麗時代の朝鮮半島や、平安時代の日本へもその思想と共に伝播して、大きな影響を与えた。

掲載の壷は俗に五彩手と呼ばれ明末清初、景徳鎮の民窯で作られた。五彩とは赤、緑、黄など一度焼成した白磁胎に色をのせて、もう一度焼成する。必ずしも五色なくても五彩と呼んでいる。牡丹に獅子も好まれた文様で、獅子も百獣の王であり、仏説によれば獅子は仏が衆生を救う為に遣わされたもので、牡丹を愛しこれを食すとある。この事からこの壷が「富と権力」を表したものだと分かる。

当時日本における陶磁器の基準は、お茶道具を第一にしていたのでこのような大壷は茶道具に適さずほとんど輸入されていない。同時期の古染や祥瑞と呼ばれるお茶道具を大量に輸入していたのに比べると雲泥の差がある。牡丹に獅子というパターン化したなかにも官窯にはない砕けた筆致が生々と感じられ、鬱々とした日など、この壷を観ていると華やかな色絵が気分を晴れやかにしてくれる。

glass & antique sara 店主・斎藤 貢

連載

骨董百話 22

佐藤朝山作 鶴香合（高さ4.3cm、幅10.5cm）

現代彫刻家の薮内左斗司氏は、近世以降世界中の彫刻界で最も優れた一人を選ぶなら、躊躇することなく佐藤朝山を挙げると言っている。1888年福島県相馬郡、宮彫り師の家に生まれ、本名を「清蔵」と言い、18歳で高村光雲の高弟である山崎朝雲（1868～1954）門下に入り、1913年に独立した時「朝山」号を与えられたが、師の朝雲との不和を機に1948年「阿吽洞玄々」を名乗り、1963年75歳で逝去した。

日本画の横山大観は「本当の天才」と言い、彫刻家の平櫛田中は朝山作品を愛蔵していた。また、同時代の彫刻家からも高い評価を受けながら、幻の彫刻家と言われるのは、1945年東京大空襲によって朝山時代の代表作を馬込のアトリエと共に消失してしまった事による。

掲載の鶴香合を見ると、小さな彩色木彫にも拘らず全体の姿の美しさ、切れ味するどい鑿跡、生々とした眼球、写実性に富みながらも作品全体から発するオーラは、さすがに天才の名に恥じない。木に親しんだ人らしく、箱も柾目の美しい物。蓋裏の四方桟にも神経が行き届き、手抜きの無い明治人のいい仕事振りが窺える。共箱であることも嬉しいが、更に平櫛田中が極書きをしていて、朝山作品と共に申し分の無い仕立てになっている。

参考までに朝山作品は、日本橋三越本店の「まごころの像」、東京国立博物館近代彫刻展示室にある「蜥蜴」、皇居前の「和気清麻呂像」等が身近に見られます。朝山に限らず、明治人の仕事は金工でも陶芸、絵画、木工、蒔絵と皆良い物ばかり。自国の美術をもっと見直していいのではないでしょうか。

glass & antique sara 店主・斎藤 貢

連載

骨董百話 ㉑

安南蓮花文大盤（15～16世紀、径31.2cm、高さ6.8cm）

蓮の発音は連と同じで、蓮の実を意味する蓮子は連子、子供が続けて生まれることに通じ、蓮は花が咲くと同時に実を付けることから、早く子供が授かるとの喩えとされている。また、連は恋にも通じ幸福な結婚と子孫繁栄を意味する吉祥文様であり、多くの工芸品に用いられている。ベトナムでは根や茎を食用に、おしべを茶葉に混ぜ合わせ香りを移した蓮茶を正月の晴れの日に飲み、花を愛でて長寿を祝い一家の平和を願う。

掲載の盤は安南陶器。クリーム色の地肌に染付で見込み一杯蓮の花が描かれている。この吉祥文様は一見して中国陶器、明初時代の束蓮図を連想させる。なるほど40㎝を超える大盤や、縁を輪花にした上手のものに描かれている霊獣文や動物文は、どう見ても高度に熟練された画工の手になると思われる。この事は、おそらく当時の中国国内の混乱を避けてベトナムに来た陶工が指導したのではないだろうか。それは陶器に描かれた文様だけでなく、ロクロの挽き方や、高台の削り方、焼成方法からも連想することが出来る。

この手の盤には径が13㎝位の小皿から40㎝を超える大盤まで様々なサイズがあるが、一番多いのは23㎝位の中盤で、草花文や鳥文等が描かれている。おもに輸出用として作られたらしく、エジプトやインド、インドネシアの遺跡や沖縄、九州からも出土している。日本は御朱印船でも輸入していて、茶碗や水指、花入等は今でも大切にされている。世の中に吉祥が稀なるが故に、皆こころのどこかでこれを求めているのではないでしょうか。

glass & antique sara 店主・斎藤 貢

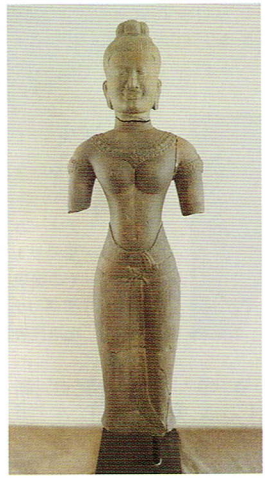
連載

骨董百話 ⑳

アンコール石製女神像（11世紀後半、在高76㎝）

美しいと感じる物に出合うことは滅多にない。もっとも美醜の基準は千差万別で、自身の思いや感性によるところが多分にあり、あくまで主観的なものでしかない。それでも多くの人が美しいと思える物も存在する。

6世紀頃からカンボジア（クメール）にインドからヒンドゥー教や仏教が伝播して以来、クメールの王達はそのいずれかを国教とし、篤く信奉した。歴代の王は常に現人神を名乗り、大寺院を建設し（アンコール・ワット等）神仏像を奉納してきた。それゆえ菩薩像や仏像の尊顔は王に似せて造られたものが多い。



この女神像も尊顔だけを見ると男性のようにも見える。肘から先が失われて持ち物が何か分からないので、尊名を決定することは難しいが、バプーオン様式（11世紀から12世紀）の腹前でカーブを描いて切れ込む裙、短軀長肢型で若々しい顔立ち、また、眼と唇の輪郭や髪や装飾品に至るまで浅い線刻で示される等、小型化されたなかにもこの時代の特徴である優美さと穏やかさを兼ね備えている。

12世紀末、ジャヤバルマン7世の死後（在位1181～1218年）ジャヤバルマン8世は、ヒンドゥー教のシバ神を信奉した為、ヒンドゥー教徒により多くの仏教寺院や仏像が破壊された。この像もそれを物語るように、尊顔と軀が破壊されている。それでもこの犯しがたい神秘性と品格を備えた女神像は、バプーオン様式の中で最も美しい像の一つだと思う。

glass & antique sara 店主・斎藤 貢

連載

骨董百話 ⑲

古伊万里山水文ケンディ（1680〜1700年、高さ15.5cm）

オランダ東インド会社は、それまで重要な交易品であった中国陶器が明王朝の混乱により手に入らなくなると、その代替品として日本の磁器に活路を求めた。

有田では1610年頃から染付磁器を作り始め、1650年には国内市場を独占していた。そのため初めは中国磁器を手本に作られ、徐々に東南アジア、アラビア、ヨーロッパ等、その国の需要に合わせた注文品に変わっていく。明王朝が倒れ清王朝が1684年に貿易の禁止を解除してからは、次第に中国陶器に市場を奪われていき、1750年頃から輸出から国内市場へと転換していく。

掲載の古伊万里は、日本では馴染みの無い形でケンディと呼ばれている。乳房状の注口部と頸を垂直に立ち上げて持ち易くしている。独特な形の割には全体の文様は山水文や草花文等、割合一般的なものが多く、文様に関しては特に指定は無かったのだろう。この形は主に東南アジア全域に輸出されたもので、古伊万里だけでなく中国陶器でも作られている。また、15世紀の安南陶器や12世紀のクメール陶器にも見られるし、青銅器や金属器にもあるので、よほどこの器形が東南アジアの風土に合っていたのだろう。一合以上は入るので日本ならば酒器として丁度良さそうだ。

約100年に亘り、九州の有田で作られた磁器が世界に向けて羽ばたいた。何と誇らしい事だろう。そして日本における輸出磁器の証左としてこのケンディは今、ここにある。

glass & antique sara 店主・斎藤 貢

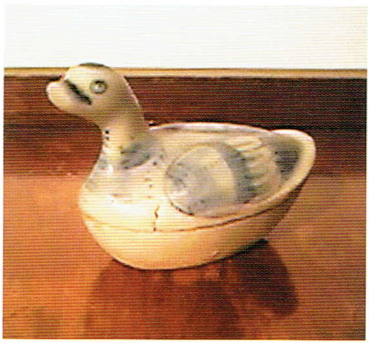
連載

骨董百話 ⑱

呉須水鳥合子（中国明時代、長さ６㎝、高さ４㎝）

お茶道具のなかで香合の役割は重要であり、濃茶・薄茶ともに炭を改める時必ず香を焚く。席中を清浄にして邪気を払い、心身を整え炭の臭気を消す為であり、その大切な香を入れるのが香合である。古くは香箱や彫漆類が主流だったが、江戸初期に茶の湯の確立と共に徐々に焼物が増えだす。見立て品から注文品まで数多くの香合が生まれたが、安政２年（１８５５）に発行された香合番付表にその集約と完成を見ることができる。

掲載の水鳥合子は鴨だろうか、小振りながら丁寧な絵付け、呉須の濃淡を生かし殊更上品に仕上げている。何よりもこの珍しい形とクリッとした愛らしい目が魅力的、身の内側にも釉が掛かり隅々まで神経が行き届いている。この合子はいわゆる呉須手に属する物で、中国南部の民窯で焼かれた物。景徳鎮の白磁に澄んだ染付とは違い、素地も藍の色もスッキリとした清涼感が無く、落ち着いた渋さがかえって茶人に喜ばれている。番付表には出ていないので形物外というところか、ならば尚更希少品と言えよう。



番付表大関に掲げられる交跡大亀、その逸話と共にあまりにも有名なこの香合を探しにインドネシアのスラウェシ島まで行った。大亀は幻に終わったが、替わりにこの愛らしい呉須水鳥合子を手に入れた。上等な裂で仕服を誂え、茶席に飾られる姿を想像すると嬉しくなってくる。掘り出し物とは何も金銭の多寡だけを言うのではなく、めったに廻り会わない物を思いがけず手に入れた時に使うのではないだろうか。

glass & antique sara 店主・斎藤 貢

連載

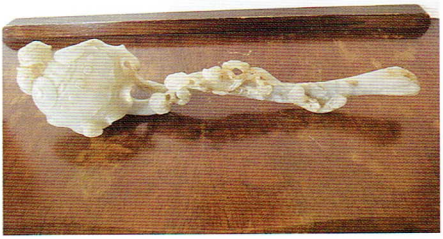
骨董百話 ⑰

玉製「如意」　（w23cm、中国明時代）

「如意」と聞いてその姿を思い出せる人は少ないと思うが「孫の手」と言えば誰でも、手の届かない所を掻く物と思い当たる。如意は仏教と共に中国・朝鮮半島を経て日本にもたらされた物で「意のままになる」という意味がある。

中国唐時代の女帝則天武后は、690年に即位し、692年に年号を「如意」とした。全ての権力と栄華を極め、仏教徒でもあった女帝が、意のままになるという年号を使用したことは、自らが一歩でも仏に近づこうと考えたのか、それとも只傲慢だっただけなのか。

如意は本来仏教僧の持ち物だが、邪気を祓ったり、吉祥の意味を持つことから中国清朝期には文人の机上のアイテムとして大いに流行した。形態としては霊芝を基本としながらも、使う材質や大きさも様々で、一般的には木製が主流だが、金属や象牙、陶器、七宝、玉など文人好みのシンプルな物から精緻な透かし彫りが施されたもの、また、皇帝や皇族の好みが反映した宝石や金銀、貴石で装飾された豪華な物まで実に多種にわたっている。



掲載の如意は玉製で霊芝の形。おそらく瑪瑙と思われる。清朝以前は玉と言えばこのような軟石が主流で、清朝に入り領土を拡大したことにより硬玉が手に入るようになり、今は硬玉が主流になっている。

今、日本で如意の出番はお茶席くらいになっているが、昔は正月の床飾りとしてそれなりの役割があったようだ。床の間も消えゆく昨今、やはり本来の目的どおり孫の手として手の届かない所を掻くしかないのだろうか。

glass & antique sara 店主・斎藤 貢

連載

骨董百話 16

スペインラスター彩紋章入水注（高さ28.5cm、17～18世紀）

近世西洋陶器の嚆矢である「イスパノ・モレスク陶器」、直訳すればムーア人様式スペイン陶器とも言うべきか。イベリア半島は7世紀に興ったイスラム教が1492年キリスト教国のイスパニア王国が建設されるまで南全域を支配していた。イスラム教最後の砦、グラナダのアルハンブラは、ムーア人の知的文化の中心であり、哲学や自然化学、金工や織物、陶器やガラスといった工芸品まで、様々な文化、文物がもたらされ、封建的な西洋社会のなか例外的に高い文化を享受していた。イスラム教徒を追放した後もその文化や技術は継承され、建築や工芸品に顕著に残っている。

この金属的な輝きをもつ陶器もラスター彩と呼ばれ、ムーア人によってイベリア半島にもたらされた。バレンシア地方で最盛期を迎えるのは15～16世紀、大小の皿や鉢、水差、酒盃などがあり、アラベスク文様の草花文や十字文、鳥や動物文、また、上手の注文品にはスペインやイタリア王侯貴族の紋章入りの物もある。

この水注はやや時代の下った17～18世紀の物。水注としたが、おそらくはワインを入れた物で両側面に動物文を配し、注口部は人の口から液体が出るように工夫されており、その下には貴族の紋章があることから、これが注文品であることが分かる。煩雑な文様のわりにうるささを感じさせないのは、不思議な輝きをもつラスター彩のおかげであろう。日本ではあまり見ることが出来ないが、誠にエキゾチックであり、品格も備えた珍しい物だと思う。

glass & antique sara 店主・斎藤 貢

連載

骨董百話 ⑮

ミャオ族　六道絵

タイ北部にはいくつかの少数民族が住んでいるが、そのひとつのミャオ族（苗族）と呼ばれている民族は、中国南部から徐々に南下して現在の地に移り住んだと言われている。近年は先祖から受け継いだ文化やアイデンティティーを失いつつあるが、それでも各民族は独自の生活様式を持っており、ミャオ族の年長者達は中国語を理解し、漢字の読み書きも出来る。

ミャオ族の宗教は道教を基本に精霊信仰が融合したもので、宗教儀式の際には僧侶とシャーマンが一緒に執り行う。寺院には様々な絵画が飾られていて、文字の代わりに絵の内容によってその意味を教えている。

粗く厚い紙に描かれた絵は、中国の道教絵画とそっくりで、ミャオの人達が中国人の末裔だと感じさせてくれる。専門の画工が描いた精巧なものから、子供が描いたような絵まで実に様々で、李朝やインドの民画、日本の大津絵にも通じる土俗的な楽しさがある。特に日本人にもなじみのある閻魔大王の裁きの場面や、その罪によって罰を受けている場面などは、実に魅力的で見捨て難い。

しかし、このような少数民族の宗教画も、急速な近代化に伴い徐々に消えつつあり、市場に出た時は出来る限り買い求めるようにしている。私も、いつか閻魔様の前に立たされた時、どんな告白をするのだろうか。

glass & antique sara 店主・斎藤 貢

連載

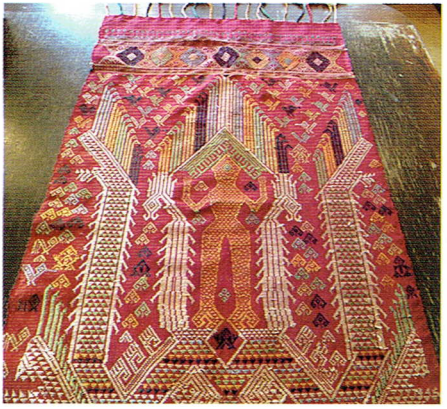
骨董百話 ⑭

ラオス浮織タペストリー

アジアの骨董店で仕入れをしていると、焼物の次に多いのが布製品で、「染める・織る」を基本にしながらも、それぞれの民族の需要や用途に合わせ、様々な文様や種類が存在する。布の制作は女性の仕事で、モチーフには意味があり、デザイン帳など無く、多くは親から子へ先祖代々引き継がれていく。

アジアの布は欧米人に人気があり、古くて良い物の多くは欧米に渡っている。日本にも茶道の関係で仕服や袱紗、掛軸の表具等は古くからアジアの布が使われており、それぞれの器物に合うように工夫が凝らされている。

20年位前、タイのバンコックに土・日だけ開催される大きなマーケットがあり（今もある）、衣料から古本、日用雑貨、食品、ペット、骨董品等ありとあらゆる物が所狭しと売られ、タイ国内だけでなくラオスやカンボジアからも業者が来ていた。何日かかけて遠くから来る業者は朝早く荷解きをするので、私も朝早く出掛け、静まりかえるマーケットでラオスから家族で来ている業者の前に陣取り、大量に積まれた布の中から古くてモチーフが面白く、状態の良い物を選んで買っていた。



3年位経った頃、その業者に「もう古い布は手に入らない。今はほとんどが化学染料の物だ」と言われた。それ以来、布の仕入れはあまりしなくなったが、茶入の仕服にも良く合うし、壁掛けやテーブルクロス、工夫次第で用途も拡がる魅力的な物で、アジアにはまだ良い物が数多くあり、こまめに探せば必ず見つける事が出来ると思っている。

glass & antique sara 店主・斎藤 貢

連載

骨董百話 ⑬

加曽利E式蛇体把手付土器
（縄文中期、BC2500、高さ40cm）

一万年以上続いた縄文時代は、世界的にも例が無く人類学上も稀有と言える。こんなにも長い間、縄文人は文字を持たなかった。いや、その必要が無かったということだろうか。しかし、全くその世界観が分からないという訳ではなく、むしろその精神性は今に残された土器や土偶等から縄文人の物語やメッセージを読み取ることが出来る。

例えば、土器に表現されている様々な文様、顔面文や人体文、蛙や蛇、祭りの時の踊る場面や出産場面、とりわけ蛇体文は縄文中期の中部山岳地域に顕著で、マムシと思われるものが多く象られている。

掲載の土器は北関東出土、縄文中期の加曽利E式と呼ばれているもの。全体にバランスの良い美しい形、口縁部に三角形の頭をもたげたマムシの雄が付き、それに向き合う雌の蛇が口縁部中央で絡み合い小さな突起を生み出している。引き締まった胴部には沈線と縄文だけの極めてシンプルな文様（蛇体文土器には何故かこのようなタイプが多い）。

冬眠から目覚め、春には地中から蘇り、咬まれたら死に至るこの蛇は、再生の祈りの為か豊穣の恵を貯える為のものなのか。文字を持たなかった縄文人の自然に対する恐れや感謝を表したものなのか。確かにこの土器からは縄文人の強いメッセージとエネルギーを感じ取ることが出来る。

今年は巳年、一年の曙にこの素晴らしい土器を掲載出来たことを嬉しく思います。未熟で拙い文章ですが今年も宜しくお願いします。

glass & antique sara 店主・斎藤 貢